

LGBTの認識の「ズレ」

3年2組10番 川畑 雫

1はじめに

今世界中で、もちろん日本でもLGBTに関する様々な問題を耳にする。例えば同性愛者やパートナーシップ制度などがあげられる。それらの言葉は全く関係の無い話ではなく私たちの身近に存在するものだと思う。私がLGBTについてテーマに上げたのはこれらの話題が私たちが思う以上に身近にあるものであり、友人や家族など身近な人の誰が直面してもおかしくない話だと思ったからである。しかしこのテーマを取り扱うのは、私の親しい友人からバイ・セクシャルだと告げられ、本当に身近な話であることを実感し、深く関心を抱いたのが最大の理由である。それにより、LGBT問題の現状をもっと深く知りたいと思った。

2序論

そこで私は「LGBT問題に対する認識のズレをどう解消するか」という問いを立てた。ここでいうLGBT問題は具体的な例として、社会単位で見た時のパートナーシップなどの制度、学校単位で見た時の制服のスカートかズボンの選択などのことを指す。調べたところ、厚生労働省の、企業に向けた「多様な人材が活躍できる職場環境に関する調査」では、「社内において性的マイノリティが働きやすい職場環境を作るべきである」と考える企業は7割に達しているという結果がでていた。この調査からLGBTの扱いをより身近なものにし、当事者が過ごしやすいうようにしようと社会全体で働きかけていることが見て取れる。しかし、そういった働きかけに対して人がどのような意見すなわち認識を持っているのか、当事者の意見が反映された上での取り組みなのかは把握出来ていないのが実状だろう。そこでそういった取り組みの中で当事者と非当事者の考えの間に「違い」があると考えた。「違い」というのは、当事者が必要だと考えている取り組みが、非当事者にとってはあまり必要と望んでいないものだったりするといったことである。ここではこの「違い」を「ズレ」という言葉を用いて表記する。現在行われている取り組みのなかで、当事者の意見が反映されているのかが定かではない以上、両者の間に「ズレ」が生まれることは、ごく自然なことであり、仕方がないとも言えるだろう。では、どうしたらその「ズレ」を解決することが可能になるのだろうか。そもそも現実的に考えて、個人の内面に関わってくる問題を解決することは可能なのか。仮説としては、私は「100%解決するのは不可能。しかし時間の経過によって良い方向に向くことは確実」がこの問いの答えだと考えた。今現代も時代の流れと共にジェンダー問題は理解を広めている。そのため、時間が経つにつれ理解がある人が増えていき、当事者も自分の「思い」を言葉にしやすい世界になっていくだろう。それに伴ってこの「ズレ」は解消されていくと考える。では実際にその過程で私たちはどのような行動をとり、「ズレ」を解消していくのか。それを明らかにしていくために、企業内で行われたアンケート調査が記載されている論文等を使い研究を進めていく。

3本論

参考にした論文の著者によるアンケートの中で、20歳以上の成人6000人の人を対象に行われた「LGBT当事者、非当事者の男性、非当事者の女性」の3つの層に対しての認識の違いについての調査を参考にする。ここで扱うアンケート調査を受けた6000人のうちにほとんどが、LGBTの言葉の意味の理解の合致があったので、LGBTとは何かという所に置いて認識の違いはない状態であることを前提とする。まず、この研究を進める上で重要な鍵になってくる「ズレ」は存在するかについてだが、先に結論から述べると、存在することが正確に分かった。「職場での性的マイノリティに対しての研修」に関して、非当事者の約60%が必要だと感じたのに対し、LGBT当事者が約40%となり、およそ20%の差が存在していることが明らかになっている。つまり、この20%の差の中には、非当事者が当事者にとっての必要以上に取り組みを求めているかもしれないという事実が存在している。またひとつ興味深いことに、「性的マイノリティに関する施策は必要ない」という項目において非当事者は約3%の賛成だったのに対し、LGBT当事者が約15%と、およそ10%の差が存在していた。それはつまり、非当事者が考えているほど当事者は性的マイノリティの面で、支援されたいとは思っていないことを表していることになる。私はこの2つのアンケート調査の結果から、LGBT関連のイベントに出席するなどといったことで、非当事者が知らない間で、本当の自分がバレてしまうことを恐れている当事者がいるのではないかと考え、そのことがここまで数値に差を作る原因になるのではと考えた。またバイ・セクシャルである知人に話を聞いたところ、「特別な施策は別に要らない」という意見もあがった。本人曰くこれは特別視されて居ることが不快だと感じたということだと言う。このような調査などからも「ズレ」があることは一目瞭然だ。それが分かったところで大事になってくるのは私の問いとしているその両者の「ズレ」をどう解消するかだ。問題解決のためにまず、そもそものズレが生まれる理由から考察する。両者の考えに違いが生まれるのは、お互いの意見や考えを知らないことがほとんどであるからだろう。実際、相手のこと、考えが分からなければ、その人が何を望んでいるかも分からないということは、私たちの日常生活の中で明らかになっている事だ。そのため、相手を理解するには意見を交流する場が必要になってくる。今の時代、意見交流は主にSNSを通して簡単に可能なものとなっている。多くのLGBT当事者の人が情報を発信しており、SNSユーザーの中で、LGBT関連の情報を目にしたことがある人は決して少なくないだろう。ここで、電通ダイバーシティ・ラボが行った「LGBT調査2018」を参考にする。この調査は、全国の20~59歳の6,229人（LGBT該当者589人/ストレート該当者5,640人）を対象に行われたものである。「LGBTに対する自分の意識が変わった・理解が深まったことはあったか」という質問に対し、そういった経験があったと答えた人(47.8%)のうち、「ドキュメンタリーやニュースを見た」(20.1%)、「映画やドラマ、アニメなどのエンターテインメントコンテンツの影響」(14.3%)、さらに「SNSやインターネットの影響」(12.9%)と続き、上位三つが「メディアによる影響」となっている。これにより、LGBTの認知に加え、理解を深め、意識を変えさせる力を、メディアは持っていることが分かった。最も影響力が大きかったニュース、ドキュメンタリーについて、「LGBTについての正しい理解を深めるようなドキュメンタリーを、見たいと思うか」という質問に、LGBT層で71.3%、ストレート層でも59.8%の人が見たいと回答した。この結果が示すのは、半数以上の人々がLGBTについて理解を深めたいと考えているという事実だ。ならば、この事実を元にして、より多くの人に、SNS(メディア)を利用することで、LGBTの人の考えや思いを知る場が増えれば、LGBTについて正しい理解を深められ、両者の「ズレ」を解消することができる。今現在日本では、例えば「おっさんずラブ」などのLGBTを取り扱ったドラマや映画、アニメなどが急激に増えてきている。実際に「LGBT

調査2018」でも、「映画やドラマ、アニメなどのエンターテインメントコンテンツにおいて、LGBTの登場人物が登場することについて、あなたはどのように思いますか」という質問に対して約半数の人が、ストレート層・LGBT層ともに、「ごく当然だと思う」と回答している。まだ、海外に比べてLGBTの登場人物が出てくるコンテンツが少ない日本でも、ここまで浸透しているのだ。

4結論

LGBTを多くの人にとって当たり前の存在にできたら、この問いである「LGBTに対する認識のズレ」は解消されると考えた。そのためにも本論で述べたSNS(メディア)の力が不可欠なものとなる。私は、LGBTを「認知」から「理解」へと変える力がメディアにはあると考えている。その力はLGBTに関するコンテンツが増えていくことでさらに大きくなっていくだろう。仮説で立てた「時間が解決する」というのも間違いではないだろう。これからの日本にはさらに多くのLGBT関連のメディアが表に出て、多くの人が目にするようになると思う。それと同時に「理解」を深めた人も増えていき、「理解」することが当たり前の世の中になって、自然と「ズレ」は解消していくのだと考える。その一方で、SNS(メディア)を使った解決方法には誤った使い方をすれば、人を傷つける可能性もある。どのような表現が当事者を不快にするか、傷つけるかといった、当事者の思いを考慮した上でのSNS(メディア)の利用法は、これからの大きなテーマとして残されている。

5終わりに

私はこの問いを設定するまで「当事者と非当事者だと、今行われている取り組みに対しての思いは絶対違うのだろうか」ぐらいにしか考えていなかった。だが、問いを設定してからは、具体的に解決法などを考えるようになった。この時間がなければきっと、ジェンダー問題について深く目を向けることはなく、問題を問題のままにしていただろう。また、このような人権に関係する問題はこれから先も、完全に消えて無くなることはまず不可能なことなのだと思う。だからといって諦めて問題を無視することはしたくないと思った。そうなっては改善の余地があるのにも関わらず一向に問題が良い方向に向かなくなってしまう。今回のテーマであげた「ズレ」を解消するには、まず今回私たちがゼミで行ってきたように、日常に目を向け、違和感などから隠れている問題に気づくこと。そして次に、気づいた問題をスルーするのではなく、ちょっと深く考えてみるのが今の私にできる事だと考えた。そのちょっとを多くの人積み重ねていくことにより、他人を気遣える世の中になると思うからである。そうして、ありのままの自分を出すのが当たり前になった世界では、今回私が問いにしたような「ズレ」が生まれることが減っていき、さらに人々の間に必ず存在する「ズレ」が問題視されることがなくなるのだろう。そういった世界を作るために、私は日常の違和感による気づきをこれからも大切にしていこう。

6. 参考文献・出典

閻 亜光, 2021, 「職場で行われる LGBT 施策に対する認識ズレ 及び職場環境分析
—LGBT 当事者と非当事者男女との比較を用いて—」, 社会システム研究, 37号, p5-6

厚生労働省, 2020, 「多様な人材が活躍できる 職場環境に関する企業の事例集」, 三菱UFJリ
サーチ&コンサルティング, p3

吉本 妙子, 2019, 「LGBTへの理解を育むメディアの力」, 「LGBT調査2018」